

第二章 第一回靈山會議話

玉井日禮

真実の仏法がよく判らない状態がずうっと続いているんですけれども.....そんな難しい問題じゃなくて、宗教で一番大切なことは何が本尊か？ ということです。日蓮大聖人は「三大秘法」という教義を立てられましたが、その中心は「本門の本尊」といわれるもので、その理論は判っていても、実体は何なのかはよく判らなかったのですね。ここにある文永十一年十二月の大本尊に書いてあるのを見ればね、これが本尊に間違いないんですね。本尊でなかったら大漫陀羅と書かれてある。ところが未だにその「大本尊」の三つの文字をみとめようとしない人の方が圧倒的に多いんですね。これを本尊と認めている人は極く僅か。日本全国でもね。そうですね、まあ、二、三百人しかいないんじゃないでしょうか。

●【大本尊と書いてあるのに大本尊と認めないのですか。漫陀羅というものも本物だからそれを認めるのか、そのこともありましょう？】

というよりもね、姿がよく似てるんですよ、漫陀羅もね。同じように、南無妙法蓮華經と真ん中に書いてあって、回りにいろんな仏さまとか菩薩の名前が書いてある、その姿がよく似てるんです。だから、大漫陀羅と書いてあっても、それを本尊にしてもいいんじゃないかという考えでね。

●【そうだとしたら、これに大本尊って書いてあるんだから、大本尊と認めていいんじゃないかなと私なんか門外漢は思いますね】

ところがね、やっぱり極く最近になるまでは、コピーなんて機械もないし、印刷とか出版というのも非常に発達してなかった時代が長く続いたわけですね。だから実際に、こういうものを自分の目で見る機会に恵まれてる人って極めて少なかったわけですね。話には聞いてるけれども、自分の目で見ない限りはね、確かめようがたいからね。だからまあ、偉い坊さんの云うことは一応信用しようと、いうので皆その自分の菩提寺の坊さんの云うことをですね、まあちょっとおかしいところがあっても、まあそんなものかなと思ってね、信じてきたわけですよ。ところがいま、いろんなものが発達して、何が真実かっていうのを、割りとだれでも研究心があれば、ある程度、自分で調べることが出来るようになったんです。それでそのお、いったいなにが本尊なのかということが、最近になって、ようやく日蓮宗の中でもですね、何を本尊にしたらいいか、今頃になって云い出したんです。いままでね、何が本尊か判らないのにね、よくしかしね、宗教活動をやって来られたと思います。そのくらい本尊っていうのは大事なんです。宗教にとっては。

例えば、僕がここで、宗教法人を作ろうとしますとね、まず、本尊を何にするかということが決まらなければ、文部省に申請書を出せないんです。教義はなにかと、なにを教典に用いるか、本尊は何か、この三つが決まらないとね、宗教法人というのは申請出来ないんです。だから一応そのお、身延でも何処でも、日蓮正宗創価学会でも皆、本尊は一応決めて居るんです。だがこれじゃない本尊なんです。これがあるところは、一箇所しかないんです。だから自分の所に昔からあったものを本尊として申請して、宗教法人の認可をもらうわけですね。

だけど、なんでも自分の所にあるものを本尊にしていいのかというと、日蓮聖人という人はそうはおっしゃっていない。本尊はこれ一つしかないんだよとおっしゃっている。

だから誰が見たって漢字が読める人だったら「大本尊」の三つ文字が読める、誰でもわかるようなことがいまだに「そうは云ってもちょっとどうかな？」と云うのが多いんです。

(笑い)

●【「甲斐」という字が見えるんですけど……】

どれですか？

●【一、二、三列目くらいの下の……】

ああ、三ヶ国の間ですね。これですか？

【もっと右です。もっと上です】

これは甲斐の国、波木井の郷山中においてこれを図す。甲斐の国というのは今の山梨県。

●【私の親や祖母だとか山梨県です。(ざわついてよく聞き取れない)】

「波木井の郷」というのは身延山の地名ですね。あそこは、「南部」という名前の大名が支配していたんですね。地名をとって波木井実長とも称ばれていたんですけど。ですから甲斐の国の波木井山の中でこれを書いたと、いうわけですね。

こういう讚文というんですか、つまりこの大本尊を讚える文章がこんなに長々と書かれたものもこれ一幅しかないんです。あとは全部簡単に「仏滅後二千二百二十余年未曾有の大漫陀羅なり」とその程度なんですね。あとこうずらずら……とこんな風に長く書いてあるのはこれしかないんです。ですからあの讚文をよく読まないの意味がわからないんです。その讚文の読み方が皆バラバラで、読みそこになっていた。大本尊に書いてあるのはちょっと読みづらいから、この紙に下手な字で解りやすく書き直したんだけどね。

伊藤さんは漢文をやった世代でしょ？ 漢文を……

●【ちんぷんかんぷん。(笑)】

ちんぷんかんぷん？

これがその讚文をちゃんと漢字で書いてあるものです。(何かを出して見ながらの話)これは薬の効能書きみたいなもんでね。そこから上が薬ですよ。だから効能書きを見なくてもそれはね、飲めば薬は効きますけども。やっぱりね、効能書きを読んで飲んだほうが良い。

「大覚世尊御入滅の後、歴をふること二千二百二十余年、然りと云えども月漢日三ヶ国の間いまだこの大本尊まします。或は知ってこれを弘めず。或はこれを知らず。我れ慈父仏智をもってこれを隠しとどむるは末代にこれを残さんとす。五百歳の時の後、上行菩薩世に現われ出て始めてこれを宣(の)べ弘む」

まあ、こう読むのが今の時点で正しい読み方だと僕は思うんですがね。しかし、まず日

蓮門下のお坊さん達は全部そうは読まないですね。あのお、真ん中の「我慈父」という所から違ってきますね。「我慈父仏智をもってこれを隠しとどむるは末代にこれを残さんが為なり」と後の五百歳の時上行菩薩世に現れてはじめてこれを宣べ弘めるというのは同じなのですが、「われじふ」と読むべきところを「わがじふ」と読む、そのお、「五百歳の時の後」と読むべきところを「後の五百歳の時」と読んでいる。そうしますと全然ね、中身が違ってきちゃうんですね。もう少しそのお、読み方をやさしくして、ひらいて書いたのがありますからご覧下さい。

このほうが解りやすいでしょう。

まあまあ、今日とはにかくこの……。あっ、皆に紹介します。こちら驚見(すみ)さんといいましてね、まったく今まで宗教っていうか、信仰にあまり経験がない人です。

無かったのね？

●【まったく無いです】

まったく無いけど、この間初めて会って、そしてこの拓本の漫陀羅を一応受持されたんですけどね、それで……。こちらもそうですね。伊藤てつこさんです。

●【(伊藤)よろしくお願ひします】

私の学生時代の同窓なんだけど、記憶はあまり定かではないんだけど。偶然何十年ぶりで現れて……。

●【(伊藤)三十年ぶり】

三十年ぶり！

●【(伊藤)早稲田出てから三十年以上経っているでしょう。私の小学校の同級生と親友で……】

●【ああ、そうですか？】

●【(伊藤)仲が良かったんですよ……】

そうー、そうー、そう、

●【(伊藤)大学は私と一緒に……】

こちらは藤原さんといいまして、今日わざわざ奈良からお出になった。

●【藤原です】

藤原さんもそうとうこういう勉強をなさっている。

●【(伊藤)奈良のどちらですか？】

●【(藤原)奈良の真ん中、田原本です。私は玉井先生の『日蓮大聖人自伝』という本を

全然知らなかったね、大阪の古本屋さんで買って、読んで、去年お手紙さしあげて電話さしあげたりして、そしてこちらに来るようになりました】

まあ、ですから今日はどういう会合になるか見当つかないんですがね。まったく、そのお、なんて云うかな、仏教入門的な話から入っていったほうがいいと思うんですね。なんせ、仏教というのは術語というか、専門用語がやたらでてきましてね、口で云ってもね……、つまり、漢字を漢音、呉音で読むわけですから、意味は、語彙(い)を知っている人でなければちんぷんかんぷんで……、それを助けるためにこのホワイトボードを買ってきましたので、むずかしいことばは文字に書きながら話を進めましょう。

最近私にとって、ちょっとショックだったのは、中村元(はじめ)さんという、東大のインド哲学科の名誉教授で、とにかくインド学、仏教学界の日本における大御所とされている人ですわね。あの方が最近出された本、「バウダ」(仏陀)とかいうタイトルの本で、私は新聞広告でしか見てないんですけども。その新聞広告のキャッチフレーズによれば

ばですね、今までの仏教受容、日本における仏教の理解の仕方、受入れ方は全部間違っておると、全部誤解に基づいてやっているという非常にショッキングな問題提起たんですよね。その中身を僕はまだ見てないからはっきりしたことは云えないんですが、おそらく、あの……、大乘非仏説、に基づくものではないかと思うんです。つまり大乘仏教というのはインドのお釈迦様が説いたものそのものではないというのは、これはもういまでは定説になっていますわね。もちろんその反論もあります。

これは仏教界の人でも大方認めている説なんです。だからといって仏教はだめだとは云ってないわけですからね。それはいいんですが、もう今度の中村元さんの問題提起は、それよりもさらにもっと衝撃的な内容のように広告からうかがえるんですがね。まあ、あの……、そういう事と……。もう一つは石由次男(いしだ・つぎお)さんといまして創価学会の第三代会長になるはずだった人。この方がやはり大変な問題提起をされでるわけですね。それは「現代諸学と仏法」という本……。これは全四巻になるはずで、いま一巻と二巻しかでておらんんですけどね。

これは主に、日蓮正宗、いわゆる創価学会員にむけて書かれた本なんですけどね。つまり日蓮正宗というより、創価学会は昭和三十五年以來皆間違った仏法をやっていると。それは仏法ではなくて、仏法以前の外道(げどう)だと、六師外道という、つまりインドですでお釈迦様によって打ち破られた婆羅門哲学を仏教の装いをこらして説いているのにすぎないんだと、痛烈に批判しているわけですね。

具体的に言えば、池田大作の教学を批判しているわけです。あれは仏法ではないといってるわけです。それを延々と一巻から四巻までそのための論証に費やしている本なんですわね。まだ二巻までしかでてませんけどね。

それで実は、私も藤原さんも日蓮正宗の教学によって仏法にめざめたというか、そういういきさつがあるもんですからね、これも非常にその……、そういう経路で仏法というものを知った人には衝撃的な内容なんですけどね。

こういう二つのショックがありましてね、私は仏法というものを改めて勉強しなおさなければならぬという気によくようになってきたところです。今までやってきたことは全部間違っていたというのはショックですからね。何をやってきたんだと……。それで結局どういふ話からはじめていいか、迷うんですが。一番基本的に仏教とは何かという

ことから始めましょうか。

苦を抜いて楽を与えるのが仏教

世界三大宗教に仏教、キリスト教とイスラム、この三つの世界宗教があるとされてますが、みんな違うんですね。どこが違うかというのと、あとの二つは一神教なんですね。仏教はどっちかというといふ汎神論なんですね。神さまは無数にいるわけですね。そしてこの仏教とは何かというといふ、仏の教えであると同時にだれでも仏になれる教え。簡単にいえばそうだと思うんですね。

キリスト教とかイスラム教というのは、人間は絶対に神になれないんですね。神の子はキリスト一人なんですね。そしてその救うものと救われるものというのとは全然水と油のような宗教なんですね。仏教というのは救うものと救われるものが結局は一つであるという意味では一神的な部分があるんですが、両方もっているわけですから仏教は、一神と汎神を。まずそういうものが仏教であるということからお話しに入りますけど。

今までの仏教学者が云うところの仏教というのは、どういうことかと云うと、慈悲ですね。仏教の教義の内容を一言でいえば「慈悲」。「慈」というのは「与楽」、楽を与える。

「悲」というのは「抜苦」、苦を抜く。苦を抜いて楽を与える。ですから悲慈とならなくちゃいけないんですけど、なんで慈悲となっているのかよく知らないんですけど、ようするに「慈悲」で、仏教の教義を一言でいえば慈悲の宗教。じゃあ、その何が苦なのか、何が楽なのかってことなんですよね。みんなこうして人間としてこの世に現れ出て今こうやって生存しているんですが、そのお、苦しみのない人っていうのはまず一人もいないというのが仏教の大前提なんですね。苦しみのない人がもし一人でもいたらそれはもうお目にかかりたいですけどね。

どなたかいらっしゃいます？ 病気になればやっぱり苦しいし、病気になっても苦しくないって人だったらもう不死身の鉄人ですよ。

とにかく苦しみのない人間はいない、そしてこの人生というのは一言でいえば苦しみの集まりだというのが仏教の……なんと云うんですか、人生理解というか人生解釈なんですね。

(訪問者とのやりとり)

ちょっとご紹介します。中条さんとおっしゃる。

●【中条です】

こちらのお三人は仏教の話聞くのは初めてのほうなんです。

仏教の入門から話始めているんですがね。ようするに人生は苦だというのが釈迦仏教の考え方なんですね、それじゃこの苦をどう抜くかと、苦の内容は何かというといふ「四苦八苦」といいますね、これは仏教からでた言葉なんです。この「四苦」というのは何かというといふ、「生・病・老・死」。生まれてくること自体苦しみだと云うんですね。心中した作家、太宰治って作家が「生まれてきてすみません」なんていうような言葉を残していますけど。生まれてくること自体が苦しみてちょっとよくわからないような気がするんですが、それはそれとして、病が苦しいのは解りますね。だんだん年をとっていく。これもやっぱり苦しいというか、さみしいというかせつないことでもあるし、死ぬことは確かに断末魔の苦しみなんていうのは文字通り苦しいわけですからね、これ

が四苦です。

八苦というのは何かというと、この四苦がすでに八苦のたかに入ってますね。その他にもう四つあるというんですがその一つが「五・蘊・盛・苦」。これは五蘊(うん)というのは我々の精神と肉体ということですね。これはともかく盛んになること自体が苦しいというんですね。それはどういうことかと言うと、煩悩、欲望というものが盛んになってそれを押さえられない、コントロールできないことの苦しみと理解できると思うんです。

それから「求・不・得・苦」求めて得られざるところの苦しみ。つまり何かを欲しいと思ってもなにかか手に入らない苦しみ。それを「求・不・得・苦」。それからもう一つは「愛・別・離・苦」。愛しいものと別離する苦しみ。これはよくわかりと思います。それから「怨・憎・会・苦」。恨めしいもの、憎らしいものと会わなければならない苦しみ。これが「怨・憎・会・苦」ですね。これで四つですから、これとこれをあわせて八苦になるんですね。これがいわゆる苦の中身ですね。この苦を抜くということが仏教というものの目的であると釈尊が説いたわけですがね。

じゃあ、苦を抜くにはどうしたらいいかっていう今度は方法の問題になりますけど、それがややこしいんですね。「八正道」、八つの正しい行いをしなけりゃいかん。これには大変な約束事がありまして、その苦を抜くために大変な修行をしなければならないと云ったのがお釈迦様時代の仏教なんですね。そんなことは今の現代人は忙しくてそんなことやってられない。それを実践するためには山の中に入って全く自給自足で生活するんであれば別かもしれませんが、こんなことは今の世の中ではできない相談で、要するにこの「四苦八苦」というのは今の現代人にも全部ついてまわっている。こういうものは俺にはないんだよという人がいらっしやったらお目にかかりたいですね。じゃあ、今の時代にこの「四苦八苦」をお釈迦様のような面倒な修業をしないで簡単に抜くことができる方法があったら教えてもらいたいもんですね。そしてその教えを残してくださいなのが日蓮聖人であるというのが、私など日蓮聖人を信じている者の仏教なんですね。ですからお釈迦様の仏法と救われるべき対象や内容は同じなんですが、救われる方法というのはまったく違うんですね。ですから釈迦仏法と日蓮仏法というのはまったく違うということが云えるんですね。

お釈迦さまは日蓮聖人にバトンを渡した

ところが、皆さんの中には仏教というとお釈迦様が始めたんだから、お釈迦様の教えでしか救われたいと考えてる人が多くいらっしやるわけですけども……。実はお釈迦様の教え、内容をよく吟味すると、末法の世といわれるいまの時代には日蓮という人に全部自分はバトンをタッチしたから日蓮から聞いてくれ、という意味のことを云っているわけですね。法華経をよく読みますと、日蓮という名前はでてきませんけれども、そういう振る舞いをする人が現れることになっています。その人にすべて自分は譲ったと宝塔品とか勸持品とか神力品とか囑累品とか法華経の中の経文のなかで、バトンタッチをしているんですね。ですからお釈迦様の教によって苦を抜きたいと思えば現代では日蓮の教えに耳をかたむけざるを得ない。そこで今度は当然、日蓮の教えはなにかということになってくるわけです。

ひと通りわたしがしゃべった中で質疑応答みたいな事もしたいと思うんですがね。じゃあ、日蓮という人の教えというのはそんなに面倒な八正道というそんな難行苦行しなきゃならないんだったら、俺はもう最初からお断りだ。僕なんかもそうなんですが、そういう面倒な修行を必要としないで、即身成仏。はっきりいえばたいした苦勞もしないで、修行もしないで苦を抜くことができる。つまり成仏することができるというのが日

蓮仏法の一大特徴なんですね。

それはどういうことかという一口でいうと、この大本尊に南無妙法蓮華經と唱えればそれでいいんだ、それ以外のことはいくらやっただって効きめはないよということを云ってるんですね。ですからその点では、親鸞や法然の唱えた南無阿彌陀仏を唱えさえすればいいんだよというのと、非常に似ている部分もあるんですね。そんな面倒くさいことは一切ぬき、ただ南無阿彌陀仏となえればいいというのが念仏つまり浄土教の教えたんですね。

ですから西洋の仏教学者なんかには日蓮の宗教は念仏教つまり浄土教というんですが、南無阿彌陀仏の垂流だという説をなす人もいるぐらいでして……。つまり、念仏が南無阿彌陀仏とさえ唱えればいいんだというふうに、日蓮教は南無妙法蓮華經となえればいいんだと、そんなふうに云う人もいるわけですけどね。しかし、その中身は釈迦仏法と日蓮仏法の違い以上に浄土教と日蓮教の中身は違うんですね。

どう違うかという、浄土教は南無阿彌陀仏とさえとなえればいいんだとってその後がないというか、底が浅いというか、それっきりで終わっちゃってるんですね。ところが日蓮教の場合は南無妙法蓮華經ではじまり南無妙法蓮華經で終わるんですが、その中身がひじょうに深くて広いといえますか、詮索好きな人は一生かかっても詮索しきれないぐらいの膨大な中身があるということ。そういう点でまずは一生つきあってもつきあいがいがあるといえますか、そういうふうにも云えるんですね。ところが南無阿彌陀仏というのは南無阿彌陀仏で始まって南無阿彌陀仏で終わってその間が無いって感じで……。

だいたい教義自体がそうなんですね。捨閉閣抛(しゃへいかくほう)といって、お経だとか勉強などはすべて捨てなさい、閉じなさい、投げ打ちなさい、離しなさいというのが日本に於ける念仏の開祖の法然の教えなんですよ。それを捨閉閣抛といっているわけです。それまでの仏教というのは膨大な体系を持ってましたからそれを勉強するためには、大変な量の経文を読まなくては行けないし、勉強もしなくては行けない。写経もしなくては行けない。そんな行は全て閉じなさいと、さしおきなさいと、それは投げ打ちなさいと、ただ南無阿彌陀仏となえれば西方十萬億土の阿彌陀仏が来迎して、手をとって極楽浄土に導いてくれるんだよ、何も面倒くさいことはないんだよ、という教義で一世を風靡していまだに風靡している部分も残っているわけですけどね。これは日蓮聖人が現れるまで日本で一世を風靡した宗教だったんですね。それはやっぱり時代相からうなずける節はあるんですね。

というのは仏教というのは相当な暇と金と何かがなければ修行できるようなものではないんですよ。だいたいお経を揃えるんだってお金がかかるし、お寺に行ってみるのも暇がないとできないし。結局貴族とか支配階級、金と暇と力のある階級しか仏教というのは勉強もできないし、修行もできなかったんですね。だから結果的に貴族仏教となる。それがやがてある階級がある階級を支配する道具として使われるようになったということが云えるんですね。

ところが今から千年ぐらい前からアジアの歴史、日本の歴史が変わり初めて民衆が奴隷の状態から脱してだんだん民衆の地位が向上といえますか、台頭してくるにしたがって宗教の方も変容せざるを得なくなった。そういう時期に浄土教というのが非常に勃興したんですね。ですからある側面からみると浄土教というのは社会を変えていく役割を果たしたという面で評価をしなくては行けない面が確かにあると思います。それで一向一揆とか、大変な民衆運動が起こって日本の歴史をある意味で変える原動力になっていっ

たことは事実ですからね。ところが仏教を学ぶ側からいうと浄土教というのは仏教の一番大事な部分である法華経業でも捨てよ、閉じよ、投げ打てと云ってしまってるんですからね、これはちょっと黙って見過ごすわけにはいかない教義の内容になっている。

そこで日蓮という人が立ち上がって、まず念仏を攻撃されたわけですね。それはなにも念仏がはびこってて今の創価学会のようにはびこってておもしろくないから、俺も一宗一派をたててやつらの向こうを張ってやろうなんてですね、立ち上がったわけではなくて……。浄土教の念仏衆の云っていることは仏教じゃないと、少なくとも仏教の本筋、大筋からかなりずれた事を云っていると、それを黙って見ているわけにはいかないというので、日蓮という人が立ち上がって念仏を攻撃し、真言も禅宗も、当時の非常に隆盛を誇っていた仏教、貴族仏教にとって変わった、かなり大衆のレベルまで下がってきた仏教全部を敵にまわし論破しはじめたわけですね。であるが故に島流しに二度もされたり、首の座に座らされたり、まあ、死刑執行寸前までいったわけですが、そういう迫害を受けたということは皆さんご存じだと思うんです。それで、いまだに日蓮は親しめないという入が多いんですが、それはその日蓮という人が何故あんなに念仏や禅宗や真言宗やその他の諸宗を攻撃しなければならなかったのか、そして戦後創価学会が折伏大行進という大変な布教運動でですね、それに輪をかけるような排他的な動きをしたわけですが、こんな過去の事実から日蓮は最初から御免だという食わずぎらいの人が多いんですよ。

私たちかもどちらかというとなんかそういう方だったんですがね。しかしよく考えてみたら、そのころ日蓮という人は放浪坊主みたいな、名もなく貧しくですね、弟子も少ない。そういう放浪坊主のような坊さんが天下の大宗教を相手にあれだけのことを云いきって、しかも島流しにされたり、首の座にすえられたりしても信念を曲げなかったというのは、なにかちょっと異常な荘厳な感じがするんですよ。大抵、妥協するとか、折れるとか、佐渡から許されて帰った時に北条幕府から立派な寺と領地をさしあげるからまあひとつおとなしくしてくれと云われたにも拘らず、身延の山中に籠もられたというのは。普通の人だったらそこらへんで妥協するんですよ。ところが絶対に妥協しなかった。それは何かということを考えたときに、その日蓮という人の行動自体がなにかを意味してるし、今の現代に残しているんじゃないかという気がしてるんです。そこでまたここで、あらゆる宗教を批判し、攻撃しようって云うわけではないですよ、わたしは。それは私の解釈は、日蓮の時代にはあの振る舞いでなければいけなかった。それは法華経、藤原さんもお存知ですからよくお分かりと思いますが、勸持品第十三というのを身で読まれたわけですね。ですから当然迫害も受けなきゃ日蓮が法華経の行者であることを立証することはできなかったわけだし、島流しも二回、首の座にも一回。これは全部法華経で予言されてる行動だったわけですね。それを好んでしたわけではないけれども結果的にそうなった。そうだったことにおいて自分こそお釈迦様が予言した法華経の行者であるということがわかったと、その自覚にたつて南無妙法蓮華経を広められたわけですが、その日蓮が未来は不軽品たるべしという予言というか、いい置きをされてるんです。未来あつての現在だと思うんです。

現在は不軽菩薩品でなければならない。ということはある程度迫害を受けるようなことは日蓮一人で十分だったわけですから、今更ここで同じことをする必要はないわけですね。それをほきちがえてやりそこなったのが創価学会でね、盛んに日蓮聖人のいう折伏をやったわけですが、それで結局国立戒壇論までいって、言論問題などで袋叩きに遭い、それで大幅に路線を修正せざるをえないはめにだったんです。

不軽品とはどういうことかというのと、折伏とは違うんですね。すべての人は仏になる可

能性を秘めた存在だから仏様だと思って手を合わせなさいというのが不軽品なんですね。だから勸持品のようにいやだという者にもあえて口の中に薬を押し込めというのと全然違うんです。非常にものやわらかな布教の仕方がいいとおっしゃってますからね、私もそれでいいと思うんですね、今は。

現代にふさわしい仏道修行とは

仏法というものは時代相や時代精神によっていろいろ使い分けられるってことをよく念頭におかないと……。秋に種をまいてみたり、春に取り入れをしたってそうはいかないわけですね。そういう時の問題ということから言いますとここに石原莞爾さんのお弟子さんだった中条さんがいらっしゃいますけど、石原莞爾という満州事変で有名な軍人がいるわけですけど。その方は一面では熱烈な日蓮教徒であったわけですが、あの人の最大の関心事は、今はいかなる時か、仏教上いかなる時かということが最大の関心事だったわけですね。それは終生変わらぬ関心事で、そして今が一番人類史上、仏教史上一番大事な時であるという認識をもっていたわけですね。そしてその認識に基づいて「戦争史観」ともいうべき理論をたて、行動した人なんです。その理論は大筋においては当たっていると思うんです。しかしあの人の予想にしろ、予言にしろですね、一番大事な部分は当たったかどうかまだ立証されてない段階なんです。そしてそれが立証されるか否かというのはあと二、三十年以内という時限をきっているわけです。その時限の切り方は仏教上の時限の切り方、仏教上の時の捉え方と全く表裏一体なんです。そういう意味で私は石原莞爾という人に非常に興味をもち、興味を覚えてその研究を、研究といったらおおげさですが、三年前から石原莞爾のものを非常によく読み、また、理解できるようになったんですけどね。

時というのはいかに大事かという事は日蓮聖人が「撰時抄」という御書の冒頭に「仏法を学せん法は必ず先ず時を習うべし」と、仏法を勉強しようとする者は今はどういう時であるかということをお勉強しなければ話にならない。そしてその時にふさわしい法を行いなさい。その時にふさわしい法とは何かと、そんなふうに始まっているわけですね。

それで結局私が日蓮仏法を二十数年まがりなりにも研鑽、実践した、まだ結論は出てないんですがその途上にあるんですけども、今の段階ではっきり云えることは日蓮という人の教え、教えた時というのは今の時で論ずれば、この大本尊を本尊としてこの大本尊を広めることが仏法を行うこと、修行することであるというふうにおっしゃっていると、僕はとらえているわけです。ですから拓本の大本尊を一人でも多くの方にお勧めして広めようということが、時に適(かな)った仏法研鑽の最良の方法である。最高の方法であるというふうには私は受けとめてやっているわけで、みなさんに厄除(よ)けの御守りを配るようなつもりでやってるわけじゃなくてね。本当の今の時になかった仏法というものを一人でも多くの方にお知らせしたい、というのはおこがましいですけど、末法適時の仏道修行はそれしかないと思っているわけです。ここで日蓮という人はこうこうこういう事を云っていたという膨大な御書をひもといて、それを全部よまなければ解らたいんだよと云われたって、それを読む暇はないですね。一千頁からの本を全部読む暇、無いでしょう？ 読んだってなかなか解らないんですよ。ですからそういう末法の、我々のような衆生のために解り易い一幅の本尊にして残すというのが日蓮大聖人の御慈悲なんです。解る人にはこの本尊はいらないんだそうです。天台大師のような頭のいい人はこの本尊がなくてもちゃんと解っていたんですからね。

まあ今の四十数億か五十数億の人類のなかで、仏教の極理を理解できるひとは、まず極めてわずかだと思いますね。大部分の人はそれが解らないが故にこういうものとして残しておくということをちゃんと讃文に書き残してらっしゃるんですね。

そういう理解に到達するのに僕の場合は三十年かかったんです。今まではむづかしい御書をなんども読んで、こっちに書いてあることとこっちに書いてあることがまったく矛盾しているようなものもあるわけですね。なんでこう、矛盾したことが書かれているんだろうと、そこで首をひねったり。そしてあっちじゃなくて、いやこっちが本尊たんだと、まったく違うものを信じこまされて、五里霧中、紆余曲折、迷路の中をさまようような二十数年間だったわけですね。日蓮教徒といえどもそういう人が大部分なんです。

今の創価学会の数百万の会員にしたって、先程もいったようにこういう本(石田次男共著『現代諸学と仏法』)が出てですね、いままで二十数年間全部池田大作の教学、つまり婆羅門哲学、仏教じゃない婆羅門哲学にだまされていたんだということを、こんな本四冊も書いて証明しようとしている人も居るわけですね。読んでみるとなるほどと思われるわけです。

石田次男という人は池田大作の先輩で三代目会長にたるはずの人だったんです。結局政治野心がないから蹴落とされていま逼塞してますけども。とにかく頭の良い人で随分、天台学を、天台の説いた法華経つまり像法時代の仏教を非常に勉強した人です。理論的には日蓮聖人よりも天台大師の方が仏教上の功績は大きいんです。膨大なる著作がありますし、理論的には天台大師をうまわるほどの仏教理論を構築した人はいないんですよ。ですから大聖人といえども、その面では天台には及ばないといえる。ただ大聖人が天台大師よりすぐれている点は、こういう大本尊をあらわした、あんな膨大な摩訶止観なんて大変な大論文は書かない代わりにこの一幅の漫陀羅でそれを全て表現できるというところに大聖人の凄さがある。理論的には天台というのは大変な人ですが、その天台学からいっていまの池田教学が全部間違っていると、何が間違っているかということ、それを彼は対話方式で説いてるわけですよ。だから非常に読ませる本ですね。

●(藤原)今、二巻まで出てるわけですね。

二巻まで出ている。これ一巻のときはタッチしてないんでね。二巻のときは一巻があまりにひどいんでね、この二巻は僕が校閲してあげた。石田さんには二回ほど会って話をしてきましたけど、なるほど大変な勉強をしますね。確かに今までの我々の仏教の理解の仕方はおかしいとこがかなりあるんですね、僕自身も含めて。それをちょっといまね、簡単にダイジェストしますけども。

要するに仏教というのは何故優れてるかということですけど。仏教以前には婆羅門教というのがあったんですね、インドに。この婆羅門教というのは修行者という意味なんですが、この婆羅門教と云われてますのは、これはいま、ヒンズー教に姿を変えて残ってますけども。この婆羅門教の哲学、これがギリシャ哲学とそっくりなんです。ギリシャ哲学から出発したのが今の西洋哲学で、西洋文明というのは全部キリスト教とギリシャ哲学を源流にしてるわけですね。このギリシャ哲学すなわち婆羅門哲学の世界観というのは一言でいいますと、この世界というのは物の集まりだと捉えているわけです。

つまり、物か心かの二元論なんです。そして心といっても結局は物だという一元論にもなる。それが集まったのが世界である、宇宙であるという考え方が基本にあるわけですね。

ところがお釈迦様というのはそうではないと、つまりこの世界のあらゆる現象は全てつながっていて原因と結果、その仲立ちとなる縁ですね、因・縁・果ですね。この因・縁・果によって成り立っているのであって単なる物ではない。つまり「事件」の集まりがこの世界だというのが仏教の基本的な考え方です。それで、婆羅門たちとやりあって婆羅

門を全て論破したが故にお釈迦様っていうのは台頭されて、そして仏教は一時期インドに大変な勢いで広まったわけですね。世界解釈の基本が違うんですね。物の集まりなのか、事件の集まりなのか。仏教は事件の集まりととらえるわけですね。我々のこの個体も事件の集まりだと解釈しないと、その実相をとらえられない、というのが仏教の基本的な考え方、ですね。その仏教の事件の集まりというのを、もう少し哲学的にいいますと、「四句分別」ということになる。これはあまり耳たれない言葉ですけど、法華經の序分である無量義經に、有にらず、無にらずというのがある。三十四箇の「非」がありますね。長にらず短にらずと一体何なのかさっぱりわからないっていうやつね。それを発展させたつまり非有・非無・亦有・亦無(ひう・ひむ・やくう・やくむ)これは四つのフレーズ(句)になってるわけですね。この四つのフレーズによって全ての物事は分別できると、つまり解釈・把握することができるというんです。この世界というのは存在と認識から成り立っていると、難しい言い方をすればそうなるんですけど。それも結局婆羅門の垂流であるギリシャ哲学の捉え方で、存在とか認識とか云ってるわけで、例えばその存在とは何か、認識とは何かとつきつめていくと不可解とか不可知論に嵌(はま)りこまざるをえないという面がある。婆羅門哲学とかギリシャ哲学では。ですからソクラテスは「汝自身を知れ」と、最後には逃げちゃってるわけですね。それじゃ汝自身、自分自身とは何かというと、それを除いてこの世界を解釈できないんだというのがギリシャ哲学です。それで、結局そのまま未解決のまま過ぎちゃって、西洋哲学の結論というのはデカルトによって「汝自身」なるものは「われ思うゆえにわれ在り」で、自分は考えるが故に自分は存在するんだと。

つまり、そこで唯心論の方向にねじまげられるわけですね。ですけど哲学としては非常に、これから説明する仏教の肝心要の四句分別に比べると何というか構造は単純なんですけど割に説得力がある。ところが仏教の存在論、認識論はそれとはまったく別な世界で自分というものはあるとも云えない、無いとも云えない。また有るとも云えるし、無いとも云える。実に、神問答のような一見へりくつみたいな理論で成り立っている不思議な存在論であり認識論であります。

この四句分別が解らない以上仏教を論ずることはできないというのが石田さんの説なんです。ところが池田大作が説いている仏法なんてものは全部存在論や認識論で説いている。西洋哲学の認識論で説いているから、あれは仏法ではない。あれはすでに釈尊の時代に打ち破られて、もうそれはとうの昔に弊履(へいり)の如く捨てられたものでしかない。

仏法っていうものはそんなもんじゃないんだというわけです。大変な苦勞をしてお釈迦さまが発見された宇宙の、或るいは我々の存在と認識の真理であって、それを発展させるどころか、それをそれ以前の状態に引き戻そうとしているのがいまの創価仏教。具体的には池田大作が書いた論文だとか、聖教新聞だとかでだしている本などから文をひいてきて、メスを入れてますが、確かにそれはなるほどと思わせるところが沢山ありますね。

ですから、それが先程云ったもう一つのショックだったわけですね。といって私は石田さんを自分の先達にしようとは思わないんです。というのはあの人はそうは云いながらこの本尊論ではまったく違うんです。この本尊論では、つまり創価学会が信仰している富士大石寺の板漫陀羅が本尊だといってゆずらないわけですね。それぐらい漫陀羅の呪縛っていうのはきついんですね。あの人の一生を縛りつける大石寺の楠板に彫られたこういう漫陀羅があるわけですね(その写真を見せながら)。それが日蓮大聖人が大御本尊だよとおっしゃったというウソを創価学会の連中はいまだに信じてるわけですね。そういう聡明な石田さんですらそれはそれで信じてるわけです。だから私とまったく相容れな

いわけです。だけど仏教理念の面では非常に教わる場所が多い。

結局、彼はこの四冊の本で池田大作と刺し違えるというか、とにかくどっちが勝つかやろうじゃないかと云っている。ところがこんな本は買って読む人は少ないんですよ。だけど、本当に心ある人はまったくいないわけじゃないから、そういう人が目覚めて、立ち上がってくれば創価学会もいつかは変わっていくでしょうけどね。

本尊とはモノなのかココロなのか

まあ、非常に雑駁(ばく)な話になりましたけどね、せつかく奈良からいらっしゃってるわけでもありますし、中条さんも、それから鷺見さんも、伊藤さんもこんな話は今まであんまり聞かれたことはないと思いますがね。あるいは聞かれているかもしれませんが少し雑談的に話を進めていきたいと思いますので、何でもおたずねになりたい事がありましたら…。

●【本尊というんですか、そのこと自体がよくわからないんですがね。僕にしてみれば本尊そのものがわかんない。本尊そのものをこういう形ですか、象徴としてもちあげてというか、取り上げているんでしょうけどね。まず、それ自体が僕としてはよくわかんないです】

本尊なんてものが何故必要なのか……ということですか？

●【こういう形にしなければならないのかということですね……】

ああ、その形あるものとして表現しなければ……本尊なるものは存在してもいいと思うけれど偶像にしたり、形あるものにする必要性がどこにあるのかと……ということですね？

●【まあ、そうですね】

それはイスラム教の思想なんですね。イスラム教っていうのはそういう考え方なんだ。絶対に偶像って在っちゃいかん。たとえ神だろうと何だろうと。だからイスラムのモスクという教会に行きますと何も無いんですよ、ただ中はがらんどうでね。ただし、壁にアラベスクといってアラビアの幾何学模様が全部奇麗に描かれたり、モザイクタイルではめこまれたり、そういうまったくのがらんどうなんですね。しかしあのモスクというのは、それ自体が実は偶像なんですよ。結局そこへ行きますとねメッカの方角へ向かって少しこう、祭壇みたいなものがあるんですね。そこには何にも祭ってないけれどもそちらがメッカの方角だよというわけで、そちらを向いて礼拝するわけですね、一日五回も。

それじゃメッカに何があるかという、メッカにはカーバ神殿というのがあって、そこに黒い大きな隕石が、一種の御神体として祭ってあるんですね。絶対に偶像はいけないと云いながら、何かそこにはないとね。要するに、なんというかなあ、それを拝むのではないと云いながらその黒い、ブラックストーンを御神体のように祭ったテントがあるんですね。そのまわりをぐるぐる回りながら、巡礼たちが、イスラム教徒たちがそこで礼拝したりしている……。

やっぱりそれは一種の偶像崇拝なんですよ。ですから人間という存在、それはまったく偶像みたいなものを抜きにして直接、神なり、仏なりと対話、あるいは接することができる人が居るでしょうけど、大部分、何か形が有るものを本能的に求めている。これ

は癒しがたいぐらいどうしようもないことでね。僕なんかでもやっぱり偶像というものは否定したいんですよね。だからできれば大本尊だって否定したいんですよね。しかしそれが否定できないだけの論拠があるんですよね。だけど心に大本尊を描ける人には必要ないと思うんです。それは大変な修行と修練と学問というかな、いろんな積み重ねが必要なんです。

●【一つの心のよりどころとして、そういうものを拝むというか、そういう事でとらえてるわけですか？】

そういう部分もありますね。要するに仏教上の三学。戒・定・慧というんですがね。そのうちの定(じょう)つまり禅定(ぜんじょう)を得るために禅宗というのは座禅をくむわけですね。禅宗というのは偶像を否定している宗派なんですけれども、それでもやっぱり釈迦の立像を本尊としてるし、やはり本堂に行けば本尊が祀(まつ)ってあるわけですよ。ところが禅宗、禅坊主が悟りを得ようとする方法は座禅をして、瞑想をして自分が仏であるということを知覚するために修行する。これが禅宗ですよ。だから禅宗的な考え方ですよ、あなたの考え方。日蓮大聖人は、だから禅宗は自語相違(じごそうい)で、矛盾しているとおっしゃっています。そういう修行で悟りをひらいたり、苦をぬくごとのできる人は千人に一人もいないというんです。大部分の人は仏が設けた方法によって救われるようになっているんです。

だから例えば、ここから奈良へ歩いて行くこともできますよね。だけどいま、歩いて行く人は千人に一人もいないでしょう。大抵やっぱり便利な乗り物を使うでしょう。そういう時代には乗り物を使って行った方が楽だし、賢明なわけですよ。だから大本尊を乗り物に例えちゃ、申し訳ないけれども、自分がそういうものに到達するための一種の乗り物と考えてもいいでしょうね。

●【そうであるとしてですよ。今、創価学会とは違うんだということですね。僕にしてみれば、全然似たようなものですね】

それはね、外見から見たらみんな同じように見えると思います。現実にも今、宗教法人の数が十八万何千かあるんだそうですよ。登録した数が。その内の三分の一は南無妙法蓮華經を唱える宗旨なんですよ。新興宗教といわれるものはほとんどそうですからね。南無阿彌陀仏と唱える新興宗教はほとんどないんです。立正佼成会にしる靈友会にしる創価学会とかいろいろありますけど。ほとんど南無妙法蓮華經です。私のふるさとの山口県に踊る宗教というのがありますけど、これはナミョウホウレンケキョウ(名妙法蓮結經)とにごらないんです。それぐらい南無妙法蓮華經というのは一世を風靡しているわけですね。じゃあ、みんな同じかということ、創価学会のように結局仏教じゃない婆羅門哲学でもってそれを仏法だと教えているようにデタラメなのが多いと。その創価学会の内部にいた三代目会長になるはずだった人がそう云ってるんですから。二十数年間その婆羅門哲学にだまされ続けていた、そんなものは仏教じゃないと。彼はただ悪口を云ってるわけではなくて、膨大な文献を駆使して云ってるわけですね。それなりに説得力はあるわけです。

ですから南無妙法蓮華經と唱えていけば全部同じかということそうじゃない、中身が違うんです。例えば、本尊も違う。靈友会なんか南無妙法蓮華經ですけども拝む対象は先祖の位牌なんです。先祖を拝むのがいいというのが靈友会の教義なんです。それを信じてる人は何百万といるわけです。だけど先祖はね、つまり、それは尊敬はしなくちゃいけないけども、本尊とはいってないわけですよ。お釈迦様も日蓮聖人もね。

●【やっぱ、創価学会の拝む対象ですか、本尊ですか、玉井さんの今取り上げている違いですが、それは創価学会の教義といますかエッセンスといますか、そういうものと違うんだということの一つの象徴としてとらえてるということに関しては、「ああそうですか」ということで、まだわかる部分はあるわけですよ。ただ、それはわかるんですけども、ただ、創価学会というのは我々の本尊とはまったく違うんだと。こちらが正しいんだ、日蓮さんもそういっているといわれても、「ああそう」っていうかんじでね】

結局ね、境智の二法(きょうちのにほう)って云ってるんですけどね。境智(きょうち)の境は本尊ということなんです。智(ち)というのは自分ということなんです。つまりこの境智の二法(きょうちのにほう)、智法(ちほう)とも境法(きょうほう)とも云うんですがね。石田さんという人は仏法というのは絶対に智法(ちほう)であると云って居るんです。日蓮聖人までの人師・論師は天台大師にしる、伝教大師にしる全部仏法は智法(ちほう)であると云っている。つまり境法(きょうほう)ではないと。自分の心のなかに仏界を湧現(ゆげん)すればそれでいいんだと、自分が悟りすましたらいいんだと。

この人もそう云っているわけですよ。本尊がなくとも仏教は成立する。それが日蓮聖人が出現するまでは、法華系の仏教に共通した考え方だった。ところが日蓮聖人がでてはじめて境法なるものをたてたんです。境智の二法(きょうちのにほう)、つまり正しい対象がなければ、正しい智恵は湧いでこない。境智冥合(きょうちみょうごう)ってことを云うんですがね。つまりいままでの智法(ちほう)、自分の内面というものだけにこだわり続けていた仏法というものを一遍ひっくり返して本来仏というものはいくつかの目にみえる形であらわしたものが大本尊だったんです。そしてそういうものに題目を唱えれば境智が冥合して仏になれると。仏法というのは智法にかたよるものでも境法にかたよるものでもない。境智が冥合して、二つであって二つでないような、その境目に仏界というのがある、というのが日蓮という人のたてた仏法の最大特色なんです。それはいままでの仏法に対する既成概念をいっぺんひっくり返すような大事件だったんです。

ですから、なんでこんなものが現れたきゃいけなかったのか。なんでこんなものを拝まなきゃいけないのか。僕だって、十年ぐらいは抵抗を感じましたよ。だけど、とにかくこれに向かって題目を唱えればいいんだという結論だけは日蓮聖人という大智慧者によってはっきり出てるわけですから……。あとで理由づけというのは自分で勉強をしていく以外にはないんですね、私の場合勉強してきた結果、成る程という結論に到達しつつあるわけで、まだ到達しきったわけではないので、いまだに何でこれを拝まなきゃいけないんだという気は残っていますよ。それが完全に無くなったときが、こっちが修行をある程度完成したときだというふうに、自分では思ってますけど。だって、そうでしょう。キリスト教だって教会に行けば、本尊として十字架がかかっているでしょう。あの偶像を否定するイスラム教ですらメッカの黒い石に向かってお尻を高く持ち上げて、礼拝するわけです。かたちとしての本尊を持たない宗教はほとんどないんです。

●【キリストの十字架の場合はあれですよ。人間の原罪というものをキリストが一人で背負ってくれたようなことを意味してるんでしょうけどね】

そういうキリストの行為、その生涯そのものがキリスト教徒にとって実に尊い事であるから、本来尊いものを本尊とする。本尊というのは、本来尊いものという意味なんです。それを本尊と呼んでいる。根本として尊敬するもの、本来尊いもの、そういう意味がこめられた言葉なんです。だからキリスト教の本尊というのは十字架なんです。あのキリストは人間の原罪をしょって十字架に自ら好んで身を投じたという、あの犠牲的

か行為が偉大なる愛の表現であるというふうな教義でしょ。教義の一番基になるあの行為、それをあの十字架という一種の偶像に表現したわけですね。だからキリストの行為そのものを拝めって云われたって、行為そのものは拝めるわけでは無いわけで、行為を十字架という形に凝縮したわけです。だからこれはね、理屈で考えてね、この本尊の意味とか、力というものを理解しようと思っても、「当世の習いそこないの学者共の夢にも知らざる法門なり」という言葉を日蓮という人は残しているが、すごく頭の良い学者がいくら頭で考えても、なんでこの本尊でなきゃいけないのか？ と考えても解らないとおっしゃってる。

本尊は紙でも板でも石でもない

だけど仏教のいろんな宗派では本尊てのはみんなそれぞれで、真言宗では両界漫陀羅といまして、胎藏界漫陀羅と金剛界漫陀羅。こういう絵漫陀羅です。これは文字漫陀羅ですが、こういう文字の部分に書いた漫陀羅を本尊としてあがめているわけですね、真言宗は。他の宗派では浄土宗では阿弥陀如来の偶像をたててるわけですね。ああいうお人形さんよりも、私はまだこの文字の方が、いわゆる偶像から遠いと思うんです。文字というのは一種の抽象的な一つの図形ですからね。文字そのものには形があるようで無いんですよ。文字というのは何かを表現する手段なんです。ですから、伝達されれば消えて無くなってもかまわないんです。本尊は板でなくてはいけなとか、紙でなくてはいけなとか、石でなくてはいけなとか、物にこだわる考え方は偶像崇拜に通じるとおもうんです。そうでなくて板でも、紙でも、石でもいいからそこに書かれたこの姿、あるいは文字の中身、文字が表現するところのもの、それは目に見えないものですよ。それが本尊だと思うんです。このつまり表装された掛軸自体が本尊ではないんですよ。ところが創価学会の人達は物だと、さっきの婆羅門哲学できたえられてるからね、物としてとらえる。だから楠の板でなくてはいけなとか。つまりこの物自体だと、本尊を取ったとか取られたとかそういう騒ぎになるわけです。だけど火をつけたら燃えるようなものが究極の本尊であるわけないでしょ。ダイナマイト一発でふっとぶ本尊が全宇宙の中心的な存在というのではあまりにも宇宙がかわいそうです。

●【僕は創価学会というのはよく知らないんですけど、そんなに力をいれて御本尊とよんでるんですか？】

そうですよ、それは大変な物ですよ。僕みたいに火をつけたら燃せるなどといったら、袋だたきにされる。御本尊に向かってなんと不謹慎なことを云うかってね。それはもう、部外者の人がピククリするような、そういう雰囲気ですよ、中は。

●【日蓮聖人は漫陀羅というのを何本くらい書かれているんですか？】

百数十体だと言われています。現存しているのは百二十数体ありますね。

●【どれも本物でしょう？】

どれも本物。本物だけど……。最初に中条さんがいらっしゃる前に話したんですがね。大本尊と書いてあるのはこれ一幅なんです。あとは全部大漫陀羅なりと、大漫陀羅の場合は法華弘通の旗印として書き表したという文章があるんです。つまり旗印なんですよ。本尊ではないんです。その旗印をみな本尊だと思ってやってるから話がややこしくなってくる。しかし本尊というのはただ一体でなければならないということは一乗の法のみあって二もなく三もなしの大乗の仏法の当然の結論であって、幾つもあるわけないんです。大本尊はこれ一つしかないことは明々白々です。あとは全部この大本尊を弘めるための旗印なんです。旗印のほうを本尊だと云っているのが創価学会とかいろいろの教団

なんです。

●【この間もちょっとお聞きしたんですけども、これの基になる紙本というのは房総半島の……】

保田妙本寺。そこにこれとそっくりのがあるはず。ただし妙本寺のはいわばポジで、これはネガになります。それが基だけれども、そのもの自体が本尊ではないというのが僕の考え方なんです。そうしないとそれを持っているものが一番偉くたって、おれの云うことを聞かないと見せないよ、ということになる。それでその本尊の奪いあいになるわけ。それじゃ、本尊がラグビーのボールみたいになっちゃうわけです。

●【先生も創価学会の批判者ですね。彼らの本尊を持ち上げすぎとかあまりにもひいきのひき倒し的な風潮に対して、こんなことを云ったらあれかもしれませんけど、あてこすりの意図をもっていらっしゃいますか？】

僕ですか？

●【創価学会など、そういうものを否定するような……】

それは僕も相当へそまがりだしね、あまのじゃくだからね、いぼってるやつはあんまり好きじゃないけども、大きいやつとかね、大勢力など。だけどその連中をやっつけるために何も苦勞する必要はないわけ。苦勞するんだったら、もっと有意義な事はいくらでもあるわけ。僕は別に創価学会を攻撃しているわけではないんですよ。ただ、日蓮聖人の教えだと云いながらまったく違う事を教えてるのをだまってみているわけにはいかない。こっちも日蓮聖人を信じてる以上、日蓮聖人の教え、本当の教えとはこうなんだよと云うことをその人達に教える義務があるんです。それを知っていて、おれは面倒くさいから何も云わたいというのは忠実な日蓮の弟子ではないと云ってるんですね。日蓮の本当の弟子だったらそういう人がいたら本当の事を教えてあげなさいというのが仏法の慈悲なんですよ。あの人達は自分達が本当だと思ってるんですからね、そう思ってたてはやっぱりそうじゃなかった場合、仏法というのは厳しいから、生活の上に現証が出ると云われているんですよ。その現証を僕は否定したいんですよ。だけど、あの人達は現証オンリーなんですよ。つまり、この本尊にそむけば罰がでると、信ずればご利益があると、ただそれだけで信じている人が非常に多いんです。それで非常に悪い現証が起きてる例がとて目につくんですよ。ところが悪い現証が起きれば起きるほど自分が悪いからそうなるんだと益々のめりこんでいっちゃう。不思議な作用があるんですよ。集団催眠現象にはね。

そして絶対的指導者は、会長だとか、本尊を絶対視させる事によって大きな組織を求心力によってまとめていって自分達の政治的な野心の道具に使ったり、そういう社会的害毒をたれ流しているわけですよ。それはひいては日本の社会の一種の悪性腫瘍、癌組織となってその母体たる日本社会組織そのものがおかしくなっていく可能性すらあるわけ。だとすればこれは対岸の火事視をしてはいられないという考え方もできるわけですよ、宗教とは別問題としても。

創価学会、公明党が日本の政治のキャスティングヴォートを握りつつあることは事実ですからね。彼らの考え方がよこしまなものである場合、やはり国民みんなが悪影響を受けざるを得ませんからね。いまのままでいくと癌組織だと思います。これは切除して摘出するわけにはいかないんですよ。あの人達を国外追放するわけにはいかないんだから……。

結局癌組織というのは散らすしかないですね、散らしてまた正常な細胞にまた還元すればよいのです。そのためにはやっぱり大聖人の考え方はこうなんだということを蠅螂の斧でもいいからふりあげていくという努力をしないとね、結局こっちも一蓮托生でね、彼らの思しき指導者のひっぱっていき方にひっぱられていかざるをえないことにもなるわけですよ。

ですから私はたとえいまこの四畳半でありますけれども、一つの宗教運動の旗上げをしたわけですよ。この運動が正しいれば広がっていくと思いますね。そして、なにもこの僕の運動だけが正しい唯一のものではなくて、こういう運動が全国各地でそれこそ云い合わせたように起こる、その事が地涌の菩薩のね、従地涌出品のあの姿だと思うんです。それはまったくいままで仏法とは縁のないような人から起こってくるというふうにも考えられる。それは今日集まられた方のような、そういうような方が本当の仏法というものを早く理解されてそれを一つの武器にしてそういう、似て非なる仏教徒たちを目覚めさせていくという運動になっていくと思うんですね。その運動がはじまって終わるまでの時間というのは非常に短いように僕は考えていますね。あと二、三十年。我々のまだ目の黒いうちに、僕がいま云ってることが事実だったかどうかということが証明されるような気がします。事実僕も、自分が好んで始めたわけではないですけど、全国の方から毎日のように手紙がくるんです。というのはこういう本(『大本尊ふたたび出現す』)を去年の夏に出しましてね、日蓮門下に対して重大な問題提起をしたのは良かったのですが、これぞ日蓮大聖人の正真正銘の大本尊といって担ぎだした男が、実はいわくつきのベテラン師でして、僕もほとんど奴にだまされかけたものですから、全国から問い合わせがくるようになったんです。お釈迦様も婆羅門の行者に騙されてはじめは婆羅門をやっつけられたわけですね。日蓮という人も最初は真言にたぶらかされて真言宗を一生懸命勉強した。あとで気がついて本当はこうだったと……………。